

民主化闘争情報

No. 937

2015年12月25日

発行 日本鉄道労働組合連合会

(JR連合)

警察庁は、12月8日に「治安の回顧と展望（平成27年版）」を公開した。今年の「治安の回顧と展望」は、極左暴力集団である革マル派が労働運動や大衆運動を通じて組織の維持・拡大を図ったとの指摘のほか、2014年6月に刊行開始した「革マル派五十年の軌跡」について、興味深い記述も見られる。

警察庁が「治安の回顧と展望」を公開

「革マル派五十年の軌跡」で自派の存在と正当性を誇示

第3巻では、全日本鉄道労働組合総連合会（以下「JR総連」という。）内における同派組織の存在に言及した12年10月付けの文書を再掲載するとともに、当時、JR総連内の一部の活動家がとった行動を批判した自派の正当性を改めて主張した。

【警察庁「治安の回顧と展望（平成27年版）」より抜粋】

「革マル派五十年の軌跡」は、同派創始者である故・黒田寛一前議長の未公開文書や過去の革命的共産主義者同盟（革共同）大会の基調報告を掲載。2014年6月の第1巻に始まり、今年2月に第2巻、同9月に第3巻が刊行されている。

上記の「（平成）12年10月」といえば、JR総連傘下のJR九州労（当時）から全組合員の8割にあたる737人が脱退、JR九州労組（JR連合）への加入を画策した時期と符合する。結局、組織的な加入を認められなかったJR九州労脱退者は、JR九州ユニオンを結成し、JR総連に加盟することとなったが、一連の「組織破壊」を巡ってJR総連とJR九州ユニオンが対立、JR九州ユニオンは除名された。

しかし、その後のスト生活資金返還請求訴訟でJR九州労の大量脱退は組織的な取り組みであったことが白日の下に晒され、JR九州労組への「潜り込み戦術」が明らかになったところである。

松崎明元 JR 東労組会長の著作集刊行に警察当局も注目！

一方、革マル派が相当浸透していると見られるJR総連及び東日本旅客鉄道労働組合（以下「JR東労組」という。）は、革マル派創設時の副議長である松崎明元 JR 東労組会長（故人）が「日本労働運動に残した功績は大変大きなものであり、その業績を後世に伝えるため」として、27年2月から「松崎明著作集」（全8巻）の刊行を開始した。 【警察庁「治安の回顧と展望（平成27年版）」より抜粋】

JR総連及びJR東労組が松崎氏の著作集を刊行したことに警察当局も注目している様子が伺える。また、今年11月号の月刊「治安フォーラム」でも著作集の刊行を通じた、若手組合員の取り込み、指導・教育などがJR東労組の課題になっているとの指摘がされている。

JRに過激派はいらない！民主化闘争を完遂しよう